

「対支文化事業」と陶晶孫——特選留学生としての軌跡

(早稲田大学) 中村 みどり

〔要旨〕

「創造社」の作家であり、また医学者であった陶晶孫は、日本留学期間の1926年に特選留学生に選拔され、また帰国後に上海自然科学研究所の研究員に就任するなど日本政府の「対支文化事業」と深い関わりを持っていた。本稿では、外務省文化事業部と東南医学院の資料を用いて、特選留学生の経歴が陶の進路に与えた影響、および彼の中国医学界における位置について考察する。その上で、陶が1925年から1929年までの文学作品の中で、「対支文化事業」の学費補給生の姿をいかに描いているかを分析し、陶が同事業との距離を測りながら、中国社会の改革に関わる自己の在り方を模索していたことを論じたい。

はじめに

中国人日本留学生が1921年に結成した文学団体「創造社」の作家として知られる陶晶孫（1897－1952）は、20余年にわたる日本留学で医学と理学を修め、日中戦争時は上海自然科学研究所の研究員として日本支配下の上海に留まった。二つの国家のはざまに身を置いた陶の文芸活動は、近年多様な視点から再評価が進められている⁽¹⁾。しかし、陶と日本の対中国文化政策「対支文化事業」との関わり、すなわち、1920年代後半に特選留学生として同事業の学費補給を受け、さらに帰国後、上海の東南医学院の教職を経て上海自然科学研究所の研究員へ就任した経歴の背景については、これまで正面から取り上げられたことはなかった。

本稿では、主に外務省文化事業部と東南医学院の資料を用いて、特選留学生に選拔された経歴が陶の進路に与えた影響、および東南医学院に就職した陶が中国の医学界で占めていた位置について考察する。その上で、留学時期の1925年から帰国直後の1929年までの陶の文学作品の中で、「対支文化事業」の学費補給を受けた主人公の姿がいか

に描かれているかを分析し、帰国後の陶が「対支文化事業」との距離を測りながら、中国社会の改革に関わる自己の在り方を模索していたことを論じたい。

I. 「対支文化事業」学費補給と特選留学生

義和団事件賠償金を資金とした「対支文化事業」に関しては、これまで近代日中関係史の視点から綿密な研究が重ねられてきた。そのなかでも、阿部洋氏は「対支文化事業」の歴史的背景から東亜同文会など各教育、文化機関の運営状況までを詳述し、日中間の摩擦をも含めた事業の全体像を明らかにしている⁽²⁾。また孫安石氏は中国人留学生を対象とした学費補給と実習に、佐伯修氏は上海自然科学研究所における日中科学者の交流に焦点を当てている⁽³⁾。本章では、主に阿部氏の先行研究に拠り、「対支文化事業」の概要を確認した上で、外務省文化事業部の資料を用いて、同事業の学費補給制度における特選留学生の特質について指摘したい。

1923年春に日本政府は「対支文化事業」の構想を提出し、外務省内に「対支文化事務局」を設置

した。だが、「文化侵略」と見なす中国政府の強い反発を受け、汪榮宝駐日公使と出淵勝次対支文化事務局長の間で非公式会議が重ねられた。その結果、1924年に日中共同運営による北京の人文科学研究所と図書館、および上海の自然科学研究所の設立が決定された。また「対支文化事務局」は「文化事業部」へと名を改め、事業は「東方文化事業」と命名され、1925年に日中の識者から成る「東方文化事業総委員会」と「上海委員会」が組織されるに至った。ただし、日本国内では、その後も旧名称「対支文化事業」を継続して使用し、1928年の済南事変により中国側委員が脱退すると、以後文化事業は再び日本の対中国政策としての性質を強めてゆく。本稿では、日中の政治のはざまに身を置いた陶の複雑な立場を考察するため、「対支文化事業」という名称を括弧付きで用いることとする。

さて、「対支文化事業」の中でも、中国人日本留学生を対象とした学費補給制度のみは、中国の内乱による官費送金の停止に対処すべく、日本政府の主導のもと、早くも1923年から部分的に開始された。その背景にはまた、1907年から15年間続いた日中政府間の協定「五校特約」、すなわち、帝国大学進学につながる第一高等学校などに留学生用の特別予科を設け、合格者には一律中国政府が官費を支給する、留学生の高等教育を支えた制度の終了があった。

「対支文化事業」の学費補給制度は、「一般補給留学生：定員320名、月額70円」「選拔留学生：定員50名、月額70円以内」「特選留学生定員：10名、月額150円、年間研究費500円以内」の3種類に区分されていた⁽⁴⁾。貧困学生の救済を目的とし、中国政府教育部に選抜を委託した一般補給留学生は、大学、大学予科、専門学校に在籍する応募者の中から各省の定員と学校の順位に基づいて選定された⁽⁵⁾。これに対して、日本の文部省と外務省が選抜にあたった、大学、大学予科、専門学校に

在籍する選拔留学生、および学部卒業後研究に従事する特選留学生は、成績が重要視された⁽⁶⁾。とりわけ、特選留学生は、応募に際し、所属大学の大学長の推薦を必要とする狭き門であったが、日本の高等官の初任給⁽⁷⁾の倍額にあたる月額の奨学金のほか、さらに研究費が支給されるなど、破格の待遇であった。なお、外務省が作成した学費補給生の調査書フォームには、「成績」「日本語」のほか、「性行（性格・勤惰・嗜好・思想）」の欄が設けられており、学業以外に本人の性格や政治思想もまた調査対象であったことを示している⁽⁸⁾。

ところで、中国教育界の知識人や日本に滞在する中国人留学生の間では、その後も「対支文化事業」に対する反対運動が続いていた。学費補給制度に関しては、当初は反対の風潮の中で受給決定後に辞退する者もあり、また日本政府への感謝の意や罰則を記した外務省宛の誓約書は「屈辱」と受け止められ、非難の声が上がった⁽⁹⁾。しかし、応募者の数は少なくなく、選拔留学生と特選留学生の倍率はむしろ高かった⁽¹⁰⁾。小谷一郎氏によれば、苦学生であった創造社の後期メンバーの許幸之は、創造社の機関誌『洪水』第3巻第25期（1927年1月）に掲載された「通信」の中で、「帝国主義者」の「強盗」が自分たちの両親から奪った財産を学費補給として奪い返すのは当然の権利である、と主張していた⁽¹¹⁾。だが、同時にまた彼は、「対支文化事業」学費補給への応募者が多数にのぼることを「恥」とも感じていたようである⁽¹²⁾。のちに、許は一般補給留学生として学費補給を受けることになるのだが、彼の矛盾した態度は、学費問題と政治問題の二者択一を迫られた留学生たちの苦境を伝えている。

特選留学生に関して言えば、やはり応募者多数のため、1926年に定員は20名に倍増された⁽¹³⁾。この定員には補給中の留学生も含み、1926年には応募者35名から8名、1927年には応募者47名から8名のみが選拔され、倍率は4倍から6倍であつ

た¹⁴⁾。また最も注目すべきは、上海自然科学研究所の運営に関する協議書に「支那人ノ研究員ニ付テハ今日ヨリ之カ養成ヲ心掛クルノ必要アルニ付特選留学生ノ制度ヲ善用シ又ハ別ニ新制度ヲ設クル等養成方法ヲ考究スルコトナレリ」と記されていたように¹⁵⁾、特選留学生制度が1931年に開所する上海自然科学研究所の中国人研究員養成の役割を兼ねていたことである。

実際のところ、1927年の上海委員会第2回総会では、上海自然科学研究所の海外研究員として特選留学生の羅宗洛、張定釗らが選定されており¹⁶⁾、1931年の同研究所開所前に特選留学生であった沈璠、楊述祖は研究員と目されていた¹⁷⁾。また、陶の姉で特選留学生であった陶慰孫も、後に嘱託研究員として上海自然科学研究所に勤務している¹⁸⁾。なお、楊述祖は同研究所衛生学科で陶の同僚となる人物であるが、「支那人トシテ珍ラシク優秀ナルノミナラス日本人ニ比シテモ確ニ優秀ナリ」「排日運動等ニ対シテハ極メテ冷淡ノ態度ヲ採リ居レリ。将来モ排日運動等ヲ為ス虞ハ無カルヘシ」¹⁹⁾、というのが文化事業部内での彼の評価であった。そのほか、文部省の調査資料「官公私立大学 専門学校支那留学生現状調」(1924年)においても、陶をはじめとする後日特選留学生に選ばれた者はいずれも、「温良」「勤勉」な人物として報告されていたことが確認できる²⁰⁾。

このように「対支文化事業」の特選留学生には、所属機関の長が推薦する、成績優秀かつ政治には関与しない温厚な人物が選ばれ、厚遇が与えられていた。つまり、特選留学制度は、まさに日本政府の要求に見合った少数精鋭の知日派エリートを育成するための制度であった。さらには、上海自然科学研究所の中国人研究員の養成を兼ねており、特選留学生たちは研究員候補者として文化事業部の監察下に置かれていたことが指摘できる。

II. 陶晶孫と「対支文化事業」との関わりの起点

陶晶孫は江蘇省無錫の旧家の出であり、1906年に東京の明治法律学校に学ぶ父親の陶挺枋²¹⁾について家族で来日した。神田の錦華尋常小学校を経て東京府立第一中学校から第一高等学校に進学する。1923年に九州帝国大学医学部を卒業すると同時に仙台へ向かい、東北帝国大学理学部に入學した。陶が1926年に上京し、泉橋慈善病院で医師として勤務し、また翌年に第一創作集『音楽会小曲』を上海の創造社出版部から刊行したことは知られている。だが、当時の陶の経歴については不明な点が多い。本章では、陶が特選留学生に選抜された前後の背景をたどり、また同時期に執筆された文学作品の中の主人公と「対支文化事業」学費補給との関わりの描写について考察したい。

1. 特選留学生としての経歴

東北帝大は、理科大学を中心として創設され、帝大の中でも研究第一主義の学風で知られていた²²⁾。陶の東北帝大進学の原因として、一つには、一高在学中にドイツの思想家ヘッケルの科学書に啓発され、人間の意識の解明を自然科学者として探求するという夢を弟の陶烈(1900-1930)と共有していたことが挙げられる。その背景として、名門校の府立一中と一高では、大正教養主義のもと幅広い学問を身に付け、ヨーロッパの思想を原書で読むような知的な雰囲気の色濃くあり、彼らの精神形成に深い影響を与えたことを厳安生氏は指摘している²³⁾。陶兄弟は、官費を得るために留学生を対象とした一高特設予科に籍を置いたが、日本人同級生と同じ一般枠で難関の一高に合格したという²⁴⁾。

知的な教育環境のなか、兄の晶孫は、東北帝大理学部物理学教室に籍を置き、また医学部の生理学教室で指導を受け、電気実験を用いた神経生

理学の研究に取り組んだ²⁵⁾。一方、弟の烈は、東京帝国大学医学部の精神病学教室で脳神経の研究を進めた²⁶⁾。本稿では詳述する紙幅がないが、陶の姉の陶慰孫、妹の陶虞孫もまた日本留学を経て生物化学、生物学の研究者となっており、留学第二世代にあたる陶家の子女は幼少より大正教養主義の影響を深く受け、学問への真摯な情熱を共有していたと言える²⁷⁾。

さらに陶の東北帝大進学のもう一つの理由として、九州帝大時代に同窓で創造社のメンバーであった郭沫若の夫人、佐藤をとみの紹介で知り合い、交際を重ねていたその妹の佐藤みさを（1899-1993）の存在があった²⁸⁾。宮城県出身のみさは、仙台のミッションスクールの尚綱女学校（現尚綱学院）と東京の女子英学塾（現津田塾大学）を卒業後、尚綱女学校の英語教師を務めていた。式典で学生代表として祝辞を述べるような才媛であった彼女はまた音楽好きであり²⁹⁾、九州帝大のオーケストラでチェロを弾き、東北帝大の管弦楽団で初代指揮者を務めた陶晶孫とも話が合った³⁰⁾。東北帝大に進学した翌年の1924年、陶はこの大正教養主義の知性と理想を共有し得るクリスチャンの女性と結婚する。

このように陶の東北帝大への進学は希望に満ちた選択であった。だが、結婚の同年、彼は一高以来受給してきた江蘇省の官費を失い、研究者としての前途には暗雲が立ち込めることになる。従来、同省の官費生は学部卒業後さらに実習期間2年の受給が保証されていたが、陶は弟の陶烈とともに受給期間を半減される³¹⁾。その背後には、官費獲得を狙う同郷の私費留学生の間で長期にわたり支給を受けてきた陶兄弟を標的とし、二人を官費生名簿から外すための留学経理員の買収工作があったという³²⁾。当時、帝国大学で研究に従事する留学生の中で官費、「対支文化事業」の学費補助のいずれも受給していない者は例外と言えるほど少数であった³³⁾。なお、妻のみさをは長男を産んだ

のち、1926年に尚綱女学校を退職している³⁴⁾。不運にも官費を失った陶は一時帰国するが、無錫の実家からの仕送りにより留学を続け³⁵⁾、やがて、特選留学生として「対支文化事業」の学費補給を得ることになる。

管見の限り、現存する外務省文化事業部の資料の中で最も早い時期に、陶熾、すなわち陶の本名が特選留学生として記されているのは、1926年7月に陶の修学旅行旅費申請に関して文化事業部と東北帝大が交わした公式文書である。これらの書類には、「東北帝国大学在学特選留学生 陶熾」が旅費200円を得て、1926年7月から8月の間に青森の東北帝大浅虫臨海実験所などを訪問したことが記録されている³⁶⁾。また添付された陶直筆の日本語の報告書には、「江蘇省教育部ガソノ緊縮方針ト日本留学廃止方針ノ為メ生ノ学費ヲ停止以来二年間ノ苦学的生活ヲ続ケテ心身疲労ヲ極メタル生ガ常ニ心悸亢進症ヲ患フ」、と官費を失った後の2年間の苦学の様子が綴られていた³⁷⁾。先述の通り、陶は1924年に官費を失っており、報告書の記述に従えば、その2年後の1926年に特選留学生に選抜されたことがうかがえる。さらに特選留学生の名簿からは、彼が1928年まで特選留学生として「対支文化事業」の学費補給を受けていたことが確認できる³⁸⁾。

ところで、陶は東北帝大を1926年9月から翌年8月まで休学していた³⁹⁾。その理由は、帰国後の将来を見据えて、東京神田の泉橋慈善病院外科で医師として実習を兼ねて勤務するためであったと考えられる⁴⁰⁾。財閥三井家の慈善事業である泉橋慈善病院の医員は東京帝大医学部から派遣されており、研修制度の整った同病院は中国人医学留学生の受け入れ先でもあった⁴¹⁾。同時期に陶はまた東京帝大医学部附属医院に所属し⁴²⁾、「対支文化事業」の補助団体であり、日本医学の中国進出を担った同仁会主催の「中華民国医薬学生懇談会」にも参加している⁴³⁾。なお、この休学期間は「対

支文化事業」学費補給の支給は中断されていた可能性が高い⁴⁴⁾。

このように上京後の陶は東京帝大医学部と関わりを持っていたが、周知の通り、日本医学界の中心にあった同学部はまた「対支文化事業」の医学関連事業の主軸機関でもあった。当時の医学部長の林春雄、および前医学部長の入澤達吉は、いずれも同仁会、東方文化事業総委員会、上海委員会の役員の任にあり⁴⁵⁾、特選留学生制度を上海自然科学研究所の中国人研究員養成に活用する案は、医学界の権威であった入澤による提案であった⁴⁶⁾。後日のこととなるが、陶烈が1930年に日本で夭逝した際、弟の死を悼んで陶が編纂した遺稿集は同仁会から刊行され、入澤が同書の題字を揮毫している⁴⁷⁾。

つまり、1926年に特選留学生に選抜され、また東京帝大医学部が管轄する病院に籍を置いたことこそが、陶の「対支文化事業」との関わりりの起点として捉えられるのである。

2. 留学時代の作品に描かれた「対支文化事業」——「理学士」「特選留学生」

第I章で述べた通り、「対支文化事業」の学費補給に対する中国人留学生の対応は様々であった。しかし、いかなる立場の留学生にとっても同学費補給は政治性を色濃く帯びた問題であったことには相違ない。陶が文化事業部に提出した日本語の修学旅行報告書の付記には、以下のように記されていた。

生ノ此ノ行ハ日本外務省文化事業部ノ恩恵ニ浴スル事多大ナリ。一九〇〇年ノ事件ハ春秋ノ筆法ヲ用ヒズトモ満州政府ノ失政ニアリ。生等多少研学ニ志ス者ハ今ヤ此等政事ニ及ブノ余裕ナシト雖今外務省文化部ガ此ノ項中ヨリ給費生ヲ設クル様努力セラレ生モソノ恵ニ浴スルヲ得タルニ就テハ衷心日本政府ニ感謝スルモノナリ⁴⁸⁾。

日本政府の「恩恵」に対する感謝の表明には、苦学の日々を過ごした後だけに多少の実感は込められていたかもしれない。しかしながら、過度に謙った口調は、外務省宛の学費補給生の誓約書の如く、一定の書式に従ったもののように思われる。公式文書には記されなかった陶の「対支文化事業」学費補給に対する違和感は、中国語で執筆し、上海の文芸誌に発表した作品の中に書き込まれる。

創造社の機関誌『洪水』に掲載された陶の短編小説「理学士」(第1巻第6期, 1925年12月)と「特選留学生」(第2巻第16期, 1926年5月)には、「対支文化事業」の学費補給をめぐる留学生の姿が描かれている。「特選留学生」は「理学士」の発表直後、1926年1月16日に脱稿されており、その内容から「理学士」の続編として読むことができる⁴⁹⁾。本稿では以下、この二つの作品における「対支文化事業」の描写を取り上げたい。

「理学士」では、主人公の無量は帝国大学理学部に籍を置く高学年の留学生として登場する。革命世代ではないものの清朝末期に来日した彼は、『義和団事件賠償金』で日本政府に養成される学生たちには、もはや清朝末期の空気を吸った世代の気概はない」と語り⁵⁰⁾、「対支文化事業」の学費補給を日本の中国に対する懐柔政策として醒めた目で眺めている。ところが、「某省の経理員が官費を彼に与えず」⁵¹⁾、無量は同学費補給への応募を余儀なくされる。さらには、選抜の優先順位の高い帝国大学に所属するにも関わらず、同郷の留学生の学費獲得の争いに撥ね退けられ、苦学の日々を送ることになる。

続く「特選留学生」では、懐の豊かな官費留学生と疎遠になった無量は、ひと冬を過ごした後、思いがけず、「日本外務省の義和団事件賠償金の特選留学生の給費」を得る⁵²⁾。彼は父親と妹からの仕送り、友人からの借金や質に入れた大学管弦団の指揮者用の燕尾服に思いを巡らし、学費補助の給付金を借金の返済に充てることを考える一

方、特選留学生の性質について鋭く言及する。

数年前日本人が日支親善のために寄宿舎を東京に建てようとした時、みんなは表立って反対した。(中略)彼らは日本人から一文受け取れば、その分親日になると思い、「君子危うきに近寄らず」で反対した。(中略)この時期に日本人が支那との親善を深めようと特選留学生制度を設けたのは、おおかた和製博士を多く育て、これら博士に中国の学界に向けて発言してもらおうという魂胆だろう⁵³。

特選留学生制度が「和製博士」、つまり知日派エリート養成のための政策であることを無量は看破している。しかし、「どのようなであっても、無量には何の関係もない、彼は博士の学位を欲することなく、博士の学位を利用して職を求めるつもりもない、ただ己の学問が成就すれば十分だ」⁵⁴、と純粋な学問の世界に閉じこもろうとする。

「特選留学生」と「理学士」の主人公無量の姿は、ともに当時の陶の境遇を踏まえており、「特選留学生」の1926年1月という脱稿の日付は、あるいは、陶がその時点で特選留学生に選ばれていた可能性があることを示している。この二つの作品では、陶自身を模した主人公の「対支文化事業」に批判的でありながら学費補給を受ける、矛盾を抱えた姿がシニカルに描かれている。

ところで、「理学士」の最後では、無量が口ずさむ愛読書のロスタンの戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック』の一節が原文のまま引用されている。19世紀フランスの浪漫派演劇を代表する同戯曲の主人公シラノは、詩人かつ剣豪であり、道化役を演じるにより権力と俗世間に立ち向かい、高貴な騎士道精神を貫く。以下が「理学士」を締めくくるシラノの台詞である。

いや、真つ平だ！ 真つ平だ！ 真つ平でえ！ 俺りやな、歌つて、夢みて、笑つて、死に、独存にして、不羈、炯々たる眼光、朗々の声、お望みとあらば斜めに頂く鍰広の毛帽

子、一言の諾否にも命を懸けての果合——而も暇がありや作詩三昧よ！ 栄誉も栄華もへちまの皮、月の世界の旅枕を、夢寐にも忘れぬますら夫だア！⁵⁵

この台詞は、第2幕第8場で、シラノが俗物の伯爵のお抱え詩人になることを断わり、友人に無鉄砲さをなだめられて、権力者にへつらうことを拒絶する場面のものである。陶は『シラノ・ド・ベルジュラック』の愛読者であり、フランス語原書のほか、英語訳、ドイツ語訳、そして辰野隆による日本語訳を所蔵していた⁵⁶。「理学士」における台詞の引用からは、陶が自己をシラノに重ね、その詩的な反骨精神に深い愛着を持っていたことがうかがえる。同郷の留学生の誹謗により官費を失い、「対支文化事業」学費補給への応募さえもままならぬ陶は、現実を物語として編み直し、諷刺的に描くことにより、心の均衡を試みようとしていたと考えられる。このような姿勢は、「特選留学生」の執筆にも貫かれている。

1927年に上海の創造社出版部から刊行された陶の第一創作集『音楽会小曲』は、大正モダニズムの影響を受けた瀟洒な作風により知られている⁵⁷。同創作集に収められた「理学士」と「特選留学生」もまた、上述のシラノの台詞の引用に見られるように、浪漫的な雰囲気は失っていない。だが、第I章で述べた通り、「対支文化事業」を痛烈に批判した許幸之の文章と同じ『洪水』に掲載されたこの二つの作品は、いずれも「対支文化事業」の学費補給をめぐる中国人留学生の複雑な政治的立場と心情を屈折した筆遣いで捉えた作品として位置付けられる。そしてまた、従来の陶のモダンな作品とは異なる、無粋な現実をそのまま写した「特選留学生」という作品名は、軽やかな筆致では覆い尽せない、「対支文化事業」から「恩恵」を受ける陶の自己に対する強い違和感を示している。

Ⅲ. 東南医学院時代の陶晶孫

陶は理学の学士号を取得することなく、長年にわたる日本留学を切り上げ、1929年2月に上海の私立東南医科大学（東南医学院の前身）に着任した。従来、陶が中国へ帰国した年は1929年と指摘されてきたが、妻のみさをが無錫から尚綱女学校に宛てた手紙によれば、陶は家族を連れて1928年年末に帰国していた可能性が高い⁵⁸。帰国後の陶が文芸面において創造社の旧友とともに上海のプロレタリア演劇運動に参加したことについては、先行研究により詳細が明らかにされてきた⁵⁹。本章では、東南医学院などの資料に拠り⁶⁰、同時期に陶が中国医学界で占めていた位置を把握する。また帰国後の文学作品における主人公の「対支文化事業」との関わりの描写を取り上げ、陶の創作面における変化について考察したい。

1. 東南医学院と陶晶孫

東南医学院の前身である東南医科大学は、1926年に上海旧城内の滬軍營外馬路に付属病院とともに設立された。初代校長（院長）の郭琦元は千葉医学専門学校の卒業生であり、留学生の同窓の協力を得て同大学を創設した⁶¹。同校の教員の約6割は日本留学経験者であり⁶²、さらにその半分は千葉医専、およびその後身の千葉医科大学の卒業生が占め、また主な役職に就いていた⁶³。北伐時に広東の国民革命軍の陸軍病院院長を務めた郭は、後述する通り、国民政府の医療、衛生部門と太いパイプを持ち、国民政府の衛生事業を管轄した褚民誼を大学理事に迎えている⁶⁴。

1929年2月、大学の新校舎が着工されると同時に生理学担当教員として招聘されたのが陶であった⁶⁵。この陶の就職は、留学期に築いたネットワークに支えられたものであったと思われる⁶⁶。翌年の1930年、教育制度の改定により同校は校名を東南医学院と改める。その後、陶は1930年2月

に学内に新設された生理学実習室の主任に就任し⁶⁷、さらに同年夏より無錫の衛生模範地区主任を務めることになる⁶⁸。その背景には、1928年に設置された国民政府衛生部による国家事業としての公衆衛生事業の推進があり⁶⁹、郭琦元は衛生部統計司第一科長を兼務している⁷⁰。このように生理学実習室主任を務め、また公衆衛生事業に携わった陶は、東南医学院の教育とともに研究を牽引する立場にあったと考えられる。

しかしながら、研究者としての意識を強く持った陶にとって、同校は必ずしも理想の職場ではなかったようである。民国期の医学界では、北京の協和医学院など由緒ある英米派のミッション系の大学と比較すると、日本留学派が関わった大学は後発組であり⁷¹。その一つである私立の東南医学院は医療、教育設備ともに「貧弱」であった⁷²。また陶の赴任後、閉校した南洋医学院の学生を収容したため、学生は500名以上に倍増し、教学の負担も軽くはなかった⁷³。後述する帰国後の陶の文学作品では、主人公が就職先の医科大学では研究室を置いていないことに落胆し、また着任先で怠惰な学生たちに翻弄される姿が描かれている。1931年1月、陶は東南医学院の専任教員を辞することになる⁷⁴。

陶の辞職の理由は定かではなく、さらなる調査が必要であるが、辞職の2ヶ月後、同仁会の機関誌『同仁』（第5巻第3号、1931年3月）に掲載された陶の日本語の文章「支那医界漫談」は、当時の彼の境遇を知る手がかりとなる。冒頭で陶は、「英米派に属して官僚ぶることも日独派の親分の豪放さも持ち合せない。書く筆は持たぬとも視界は明瞭にして繊細、貧しくも独立にして不羈、ペラペラ廻る風車を攻撃するドンキホーテの役ならいつでも引き受けやうと云ふ者」、と自己を諧謔的に紹介する⁷⁵。そして、中国の西洋医学界では、英米医学派が日独医学派を見下しているため、日本留学経験者には居場所がなく、さらに日本留

学経験者は派閥で分裂していることを述べる。

今支那で成功してゐる日本出の人々は大抵元の医専出で帝大出ではない。それは日本で高等学校を経過した人はその間に支那の国民性から段々離れるからだ。帝大出の人々は高等学校にゐて文学専門家から独逸文学をきき数学専門家から数学をきいて別趣の学問をした。斯う云ふ一般的教養は支那では邪魔になる。(中略)我々でも再び外国へ行き或者は研究に従事し或者は高等学校時代に帰へつて、文学でも法学でもした方がましなのである⁷⁶⁾。

「実学」を重んじる中国医学界では、大正教養主義的な学問を身に付けた帝大出身者の活躍の場がないことを陶は明らかにする。だが、同文章の主旨は、むしろ医学とともに文学を嗜む「医学文士」こそが、人間の身体と精神を深く理解し得るという反論に置かれている。その発言には、陶自身の「医学文士」としての矜持、そして、東南医学院が該当するように、日本留学派では「医専出」が主権を握る中国医学界に対する違和感が滲み出ている。一方、陶は日本の医学界に対しても客観的な視線を向けていた。日本では「支那人」の機嫌を取るために「支那」という語の使用を避けていると触れた上で、「支那医界漫談」という題名について、「先づ此の支那の二字から見て何か僕が同仁の宗旨に反対する様な支那輕蔑を書くだろうと思ふ方があつたらその御心配は無用に願ひませう」と揶揄を込めて記す⁷⁷⁾。この一文は、同仁会をも含む「対支文化事業」が掲げる「日中親善」とは、日本主体のものであることを鋭く突いている。

陶が自己を例えたドン・キホーテは、権力と俗世間に無鉄砲に立ち向かう孤高の騎士像という点において、まさに前出のシラノと一致する⁷⁸⁾。帰国直後の陶は、東南医学院の生理学実習室主任を務め、さらに国民政府が推進する国家事業としての公衆衛生事業に主任として携わったものの、中

国医学界の中心から離れ、また日本医学界とも関わりは持ちながら一定の距離を保っていた。孤高の騎士であったドン・キホーテとシラノの姿は、脇役の「医学文士」であるがゆえに医学界のいかなる派閥にも迎合せず、透徹した目を持ち続けようとした陶の姿勢に重なる。

2. 帰国後の作品に描かれた「対支文化事業」

(1) 「到上海去謀事」「畢竟是個Petit Bourgeois罷了！」

帰国後、陶は数編の小説と翻訳作品を創造社の旧知の張資平が上海で刊行する文芸誌『楽群』に発表した⁷⁹⁾。そのうち、短編小説「到上海去謀事」(第1巻第4期, 1929年4月)と中編小説「畢竟是個Petit Bourgeois罷了！」(第1巻第7期, 第2巻第8-9期, 1929年7-9月)には、「対支文化事業」の学費補給を受け、帰国後に上海の医科大学に着任する主人公の様子が描かれている。「畢竟是個Petit Bourgeois罷了！」に関する先行研究としては、改題後のテキスト「畢竟是個小荒唐了」⁸⁰⁾を通して、陶の分裂したアイデンティティを解説した坂井洋史氏の論考が挙げられる⁸¹⁾。本稿では、以下、先行研究を参照しながら、「到上海去謀事」と「畢竟是個Petit Bourgeois罷了！」における主人公の「対支文化事業」の学費補給を受けた過去への言及の語りを分析したい。

「到上海去謀事」では、主人公「私」、別称「老T」は、長年にわたり日本に留学し、学問の世界に身を置いていたため、中国社会に馴染むことができない。無錫から上海に向かう列車の中でも、中国人ボーイたちの不衛生な振る舞いに目を見張る。上海では留学時代の友人の間を奔走し、ようやく某医科大学の教職のポストを得る。だが、研究者志望の「私」は、「留学監督処の経理員に登録を抹消され、日本外務省に苛められたが、それでも心静かに学問に打ち込み、思索することができた。今こうして、研究室のない学校に赴き学生

に苛められるとは、夢にも思わなかった」⁸²、と失意の涙を流す。結局のところ、「私」の日本式の講義は不勉強な学生たちには受け入れられず、作品の最後、「私」は日本の研究生活に戻ることを決意する。このように「私」は、「対支文化事業」の学費補給を受けた経験を「日本外務省に苛められた」と揶揄するものの、日本留学の中で自己の精神が形成されてきたことを認識している。

続く「畢竟是個Petit Bourgeois罷了！」では、主人公「私」、別称「晶孫」は、上海の某医科大学の教授であるが、大学の水準の低さに失望し、やはり日本へ戻ることを望んでいる。主人公の境遇が重なることから、同作品は「到上海去謀事」の続編として読むことができる。ただし、主人公は、昼は大学教授、夜はダンスホールでラップ吹きとして働き、二人の女性、中国人ダンサー彌吉林と西洋の血を引く女優雪才納の間でさまようなど、より多層な姿を露わにしている。また、物語の構成も入り組み、「現在」と留学時代の過去が交錯し、舞台は上海、無錫、東京の間を行き来する。坂井洋史氏は、『音楽会小曲』に収められた短編小説「両姑娘」でも、日本人女性と中国人女性の二人に惹かれる主人公が「晶孫」と名付けられていたことに着目する。そして、「畢竟是個小荒唐了」（「畢竟是個Petit Bourgeois罷了！」）の改題後のテキスト）に登場する彌吉林と雪才納、「私」はいずれも陶の分身であり、一つの国家に収斂されない、日中のはざまで宙づりとなり、分裂した陶の姿が描かれていると分析する⁸³。以下、この主人公の分裂に関する指摘を手がかりとして同作品を読み進めてみたい。

小説の冒頭では、「現在」の状況を悔やむ「私」の独白が語られている。「大学卒業後に日本外務省から義和団賠償金が支給されず、研究生活を数年延長することがなかったら、大学の水準の低さに失望することもなかっただろう」と「私」は「現在」の不遇を「対支文化事業」の学費補給を受け

た過去に結び付け、後悔してみせる⁸⁴。この諧謔味を帯びた独白では、研究者としての理想を胸に帰国したものの、混沌とした中国社会の中で居場所を探しあぐねる「私」の不安定な心情が語られている。また「私」は、ダンサーの彌吉林を連れて共同租界の黄浦江沿いの公園を訪れるが、同公園は以前中国人の入園を禁じ、子供の頃に「私」が外から日本人の児童が遊ぶのを眺めていた場所であった。この公園に足を踏み入れた「私」は、再び「対支文化事業」の学費補給生であった過去について触れる。

自分に至っては、流行の小奇麗なスーツを着込み、外国で生活し、ほどほどの英語とドイツ語を操り、外国人と付き合い、外国の女性を腕に抱いた。義和団事件賠償金を得て留学したため、当然ながら義和団の匪賊より少しは進歩した訳だ。また各地の経済勢力というものは、決して一刀両断できるものではないことを知った。従って我々も日々憤慨し、むやみに騒ぎ立て、わざわざ頭を悩ませることはないのだ。このように考えれば、留学先での気ままな生活を中国帰国後も享受することができる⁸⁵。

この二度目の「対支文化事業」に関する言及では、中国人が「文化侵略」と見なす「対支文化事業」から「恩恵」を被った、「私」の中国人としての自己、そして「対支文化事業」の学費補給を受けて研究に専念した元留学生としての自己との間のねじれが自嘲気味に語られている。このような経歴の持ち主である「私」は、列強の中国支配に対して民族主義的な義憤を抱くことはナンセンスだと述べる。だが、これが逆説的な表現であることは、作品の至る所に現れる「私」の二面性が示している。例えば、共同租界のホテルで白系ロシア人のダンサーやアメリカ人の富豪と享樂的な時間を過ごす「私」は、一方では、被支配者である中国人の立場から列強に分割された上海の風景を心に刻む。上記の引用の独白の後、「私」は、

黄浦江を旋回するイギリスの巡洋艦、アメリカの戦艦、天皇家の紋章を輝かせた日本の軍艦を眺め、イギリス船の船体に国旗のみならず書かれた「大英国」の三文字は、国旗を知らない中国の「土人」に理解させるためだとつぶやく⁸⁶。また、その直後に起きた、アメリカの戦艦が中国の小舟を跳ね飛ばし、何事もなかったかのように立ち去る事件の一部始終を「私」は目に焼き付けている。

ところで、「私」がダンスホールのラッパ吹きを兼職する理由とは、「私」の小学校時代の同級生、すなわち、傷を負い働けなくなった日本人水夫を養うためであった。彼は労働組合の中心的人物であったため、会社から見放されていた。本作品の題名「畢竟是個Petit Bourgeois罷了！」は、この同級生が警察に逮捕され、日本へ送還される前に「私」に投げかけた言葉に由来するものである⁸⁷。「君はやっぱりプチ・ブルジョアだ」とは、上海の中で租界の西洋文化を享受する留学帰りの知識人「私」に対する非難に他ならない。そして、この友人の言葉の引用には、さらに「私」の自戒が込められている。だが、そこにはまた、知識人として自己を形成してきた「私」の逆説的なアイデンティティの表明が読み取れる。実生活ではプチ・ブルジョア的な都市生活を享受しながら、プロレタリア文学を提唱する作家を「私」は辛辣に諷刺し、彼らが提唱する左翼文芸理論「プロレタリア・リアリズム」に対抗して「プロレタリア・ロマンチズム」という言葉を創作する⁸⁸。「プロレタリア・ロマンチズム」とは、時代の趨勢である左翼文芸に目を向けながら、空虚なイデオロギーへの同化を避け、浪漫的で不屈な精神を手放さない「私」の姿勢をまさに示している。

半植民地都市上海をさまよう主人公の姿を描いた「到上海去謀事」と「畢竟是個Petit Bourgeois罷了！」の作風は、主人公の詩的な小世界を描いた第一創作集とは大きく異なる。とりわけ「畢竟是個Petit Bourgeois罷了！」では、多様な立場の

人物が登場し、多様な価値観が提示され、その混沌とした時空間の中で「私」は出口のない彷徨を続けている。「列強」日本に留学し、大正教養主義を通して西洋文化を身に付けた知識人の「私」と被支配者である中国人としての「私」、自然科学者としての理想を抱く「私」と就職先の医科大学で奮闘する「私」、浪漫主義に愛着を抱く「私」と左翼文芸理論に目を向ける「私」など、多様な価値体系の間で分裂する「私」の姿が描かれている。「老T」「晶孫」という主人公の命名からは、中国社会の中で葛藤する自己の姿を突き放して戯画化することにより、むしろ日本留学経験者の知識人としての自己の精神を再確認しながら、多難な現実に向き合おうとしていた陶の姿が浮かび上がってくる。

(2)「博士的来歴」

さて、陶晶孫は郁達夫から『大衆文芸』の編集を引き継ぎ、1929年秋より誌面の刷新を図り、自らプロレタリア色の強い創作、翻訳作品を積極的に掲載した⁸⁹。そのようななかで、同誌第2巻第2期(1929年12月)に掲載された陶の短編小説「博士的来歴」には、特選留学生に選ばれた留学生在が「対支文化事業」と密接な関わりを持つ過程が描かれている⁹⁰。本稿では、特選留学生としての経歴が主人公の進路に与えた影響に注目し、作品の読解を試みたい。

主人公「私」、別称「維羞」は長年日本に留学した経験を持つ。上海無錫間の列車内で中国人ボーイの不衛生な行為をとがめる諷刺的な眼差しは、「到上海去謀事」の冒頭に重なる。やつれた「私」は帰国後の苦勞を留学時代の苦学に結び付け、日露戦争直後の日本では中国人留學生の粗野な振る舞いが疎んじられたことなど、中国人日本留學史を皮肉を交えた軽妙な口調で語りはじめる。「中学校でゲーテのミニオンを読み、ウェルテルの悩みを読み、ファウストを読み、シラーの群盜を読

んだ（原文のままで！）」、このように名門校で大正教養主義の教育を受けた「私」は⁹¹、中国人留学生の集団とは異なる存在として自己を位置付けているが、その「私」の自己に対する視線にも諷刺が込められている。

そのような「私」の留学時代の物語は、東京のダンスホールの描写からはじまり、「私」は「維羞」という名前で登場する。官費を失い、さらに「義和団事件賠償金」学費補給の応募にも失敗した維羞は、馴染みの日本人ダンサーに不満を訴え、「支那本来の文化を破壊し、支那の文化を略奪して自国へ持ち去る」と「対支文化事業」を非難するビラを作成する⁹²。しかし、ビラ受取りの当日、特選留学生に選抜された通知を受けた彼は、態度を翻して外務省宛の誓約書に署名する。

「今般貴処に特選留学生として選ばれ、月額150円を頂戴し、生理学の研究に専念いたします。貴処の規定を遵守し、違反した場合は支給が停止されても異議はございません。研究期間は兼職せず、毎年1回研究報告書を提出いたします。 某姓維羞」。

彼は日本語タイプライターで打たれた氏名の下に印を押した。学監は鞆から包みを取り出し、その中には日本円300円が入っていた⁹³。

維羞という奇妙な名前には、言うまでもなく、義和団賠償金を資金とした「対支文化事業」から「恩恵」を浴することを「恥ずべき」行為と見なす中国人の立場に立った視線が込められている。第I章で述べた通り、後期創造社の許幸之は同事業の学費補給への応募を当然の権利と捉える一方、「恥」とも感じていた。また外務省宛の学費補給生の誓約書の文面は留学生の間で「屈辱的」と捉えられ、非難の声が上がっていた。この誓約書への署名と引き換えに高額の奨学金を手にする維羞の姿は、まさに「恥ずべき」ものとして戯画化されている。

その後、特選留学生となった維羞は、将来につ

いて漠然とした不安を抱くようになる。

博士、博士、博士は中国では金儲けの肩書だ。（中略）博士号を取得して帰り沢山の商売ができるのだ。だが、彼には出来ない。彼が研究しているのは生理学であり、しかも近年の電気学的な手法を用いたものに偏っている。研究所以外に行くところがない。日本人の文化事業の研究所に至っては、彼は絶対に行きたくなかった。（中略）彼は思った、新しい研究所を作ろう。そうだ、そうだ、やつらに立ち向かうのだ、痛快だ、痛快だ、E、E、我々は痛快だ⁹⁴。

維羞の専門は、陶の東北帝大での専攻、電気実験を用いた神経生理学に重なる。彼の独白や専門を踏まえれば、「日本人の文化事業の研究所」とは、他ならぬ上海自然科学研究所を指していると考えられる。そして、特選留学生となった維羞が「日本人の文化事業」への参加を拒絶していたのは、日本に政治的に利用される知日派知識人となることを警戒していたためだと推測できる。だが、結局のところ、彼は博士号を取得し、さらに上海自然科学研究所と思しき「某研究所」の研究員に就任し、同研究所の竣工を待つばかりの安穏な日々を過ごす。そのようななか、偶然にも、某大学が左翼運動弾圧のため落第生に金銭を与えてスパイとして用いたという雑誌記事を目にした維羞は、「自分が以前、いとも容易く賠償金を貪り、今さらに地位まで手に入れたのは、雑誌に書かれていることと同じではないのか」⁹⁵、と自己をスパイに重ねて動揺する。そして、帰国して「日本政府の賠償金悪用の内幕」を訴えることを決意するが⁹⁶、現実の改革はままならず、中国社会の荒波に翻弄される彼の姿を捉えて物語は幕を閉じる。

このように「博士の来歴」では、主人公が「対支文化事業」の政治性を警戒しながら、特選留学生を経て上海自然科学研究所の研究員となり、同事業に巻き込まれてゆく姿を描いている。維羞の進路は、特選留学生制度が上海自然科学研究所の

中国人研究員養成を兼ねていたことを示しており、奇しくも現実における陶の選択を先取りしていた。維羞のモデルは陶とは言い切れない。だが、この辛辣な諷刺を込めた名前は、まさしく特選留学生であった陶自身の「対支文化事業」との関わりを深めることに対する危惧、それと同時に、研究者として上海自然科学研究所への就職という選択肢を前に揺れ動く苦悩を表しているのではないだろうか。

「博士的来歴」は、第二創作集『濃霧』（1930年）をはじめとする、陶のその後の作品集に収められることはなかった。その理由とは、「対支文化事業」に密接に関わる特選留学生の姿があまりにも現実に即して描かれており、そして、図らずも、或いは自ら危惧した通り、本作品を発表した2年後に陶が維羞と同じ道を選択したためであったと考えられる。

おわりに

陶晶孫が特選留学生に選抜され、また東京帝大医学部管轄下の病院に籍を置いた1926年は、折しも外務省文化事業部が「対支文化事業」の留学生政策に本格的に着手した時期であった。同年より特選留学生の定員は倍増されている。翌年、同仁会主催の「留日中華民国医薬学生懇談会」が東京で定期的に開催され、同会機関誌『同仁』が復刊し、さらに日華学会編纂の留学生名簿の刊行が始まる⁸⁷⁾。その背後には、日中間の政治的な摩擦が激化する時代、日本留学経験者とのネットワークを強化し、「日中親善」の基盤を作ろうとした日本政府の政治的な意図があったことは言うまでもない⁸⁸⁾。1928年の済南事件の勃発により東方文化事業総委員会と上海委員会の中国側委員が総辞職した後、日本政府の中国人留学生政策の必要性はいっそう高まってゆく。そのような状況のなか、特選留学生であった陶は上海自然科学研究所中国人研究員候補者の一人として、「対支文化事業」

との関係がより深まりつつあることを認識していたと考えられる。

帰国後の作品「到上海去謀事」「畢竟是個Petit Bourgeois罷了！」では、主人公は「現在」の不遇を嘆き、日本での学術的な生活を懐かしむ。表面的に読めば、陶はあたかも知日派知識人としての揺るぎない自己を持ち、上海自然科学研究所への道を選んだように思われる。だが、この二つの作品をも含めた1925年から1929年の小説の中で、陶は「対支文化事業」をめぐる留学生の日中の政治に挟まれた苦境を描き続けてきた。これらの作品には、多様な価値観の対立の中で引き裂かれながら、いかなる政治的権威にも追従せず、精神の均衡を取り続けようとした陶の葛藤が織り込まれている。1929年年末から1930年にかけて、陶は文芸面では上海のプロレタリア演劇運動に精力的に参加する。そして研究面においては生理学のみならず、公衆衛生事業に打ち込んだ。この「政治に無関心なエリート」という特選留学生像から大きく踏み出した、時代の転換に歩調を合わせた行動は、帰国後の陶が「対支文化事業」との距離を測りながら、中国社会の改革に寄与する自己の在り方を模索していたことを語っている。

〔注〕

- (1) 太田進「帰国後の陶晶孫」（『野草』第28号、1981年9月）の先駆的な論考以来、近年では、嚴安生『陶晶孫 その数奇な生涯——もう一つの中国人留学精神史』（岩波書店、2009年）、黄英哲「越境者としての陶晶孫——『淡水河心中』論」（『立命館文学』第615号、2010年3月）、坂井洋史「離散的語言体験——陶晶孫新論」（『中国現代文学研究叢刊』2011年第11期）、鈴木将久「『対日文化協力者』の声——陶晶孫の屈折」（『上海モダニズム』中国文庫株式会社、2012年）などの論考において、陶の日中に跨るアイデンティティとテキストの読解が進められている。

- (2)「対支文化事業」に関する代表的な論著として、阿部洋『「対支文化事業」の研究——戦前期日中教育文化交流の展開と挫折——』（汲古書院、2004年）が挙げられる。また山根幸夫『東方文化事業の歴史 昭和前期における日中文化交流』（汲古書院、2005年）では、日中共同運営として出発した研究所と図書館の設立について詳述している。
- (3)孫安石「経費は遊学の母なり」、大里浩秋・孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』御茶の水書房、2002年、「戦前中国人留学生の『実習』と『見学』」、大里浩秋・孫安石編著『留学生派遣から見た近代日中関係史』御茶の水書房、2009年、佐伯修『上海自然科学研究所 科学者たちの日中戦争』宝島社、1995年。日本人中国派遣留学については、岡野康幸「近代における日中文化交流の一側面——「大興学会」と橋川時雄を中心に——」（『日本聞一多学会報 神話と詩』第7号、2008年12月）などの先行研究がある。
- (4)外務省文化事業部「対支文化事業の概要」『日華学報』第3号、1928年2月、70-72頁。「特選支那留学生補給規程」「特選支那留学生補給ニ関スル内規」「特選支那留学生学費支給規程」アジア歴史資料センター、Ref.B05015512700、第18-19、30、39-40画像、外務省外交史料館、B-H-05-03-00-01-01-00-01。本稿に記した各学費補給生の定員と支給額は当初のものである。受給期間は基本として2年間であった。以下、本稿では、アジア歴史研究センターは略称「JACAR」と記し、外務省外交史料館は「外務省」と記す。
- (5)選定における学校順位については、「大正十三年度学資補給支那留学生ノ概況」（JACAR、Ref.B05015411600、第4-5画像、外務省、B-H-05-00-00-03-00-00-00）を参照。
- (6)「特選支那留学生選定及給与標準」「特選支那留学生選定標準」JACAR、Ref.B05015512700、第7、37画像、外務省、B-H-05-03-00-01-01-00-01。
- (7)森永卓郎監修『物価の文化史事典』展望社、2008年、395頁。
- (8)「支那留学生給費実施大綱」JACAR、Ref.B05015412400、第14画像、外務省、B-H-05-00-00-03-01-00-01。注(3)前掲、「経費は遊学の母なり」は、学費補給実施にあたり、中国人留学生が様々な角度から実態調査を受けていたことを指摘している。
- (9)注(2)前掲、『「対支文化事業」の研究』346-347頁。「庚款補助金ニ関スル意見（大正十四年二月十九日）」「対支文化事業部ノ学資支給ニ対スル支那留学生ノ不平」JACAR、Ref.B05015411600、第18、34画像、外務省、B-H-05-00-00-03-00-00-00。
- (10)注(4)前掲、「対支文化事業の概要」によれば、選抜留学生は1926年には候補者170名、1927年には候補者330名から、それぞれ35名、30名が選定された。
- (11)小谷一郎『一九三〇年代中国人日本留学生文学・芸術活動史』汲古書院、2010年、31-34頁。「学費補給中華民国留学生調」（『同仁』第2巻第2号、1928年2月）によれば、許達（許幸之）は一般補給留学生として学費補給を受けている。
- (12)許幸之「通信」『洪水』第3巻第25期、1927年1月（上海書店影印本、1988年）、41頁。
- (13)「特選支那留学生ノ定員増加ニ関スル高裁案（大正十四年十二月十四日決裁）」、注(6)前掲、「特選支那留学生選定標準」第23、37画像。
- (14)注(4)前掲、「対支文化事業の概要」。
- (15)「上海自然科学研究所設立ニ関スル専門家協議会記事（大正十四年一月九日）」JACAR、Ref.B05015188100、第8画像、外務省、B-H-03-02-00-02-01-002。注(13)前掲、「特選支那留学生ノ定

- 員増加ニ関スル高裁案」でも、特選留学生制度を上海と北京の研究所の中国人研究員養成に活用することが述べられている。以下、本稿では、1920年代から1930年代の資料を引用するに際し、旧字を新字に改める。
- (16)注(2)前掲、『「対支文化事業」の研究』524頁、注(4)前掲、「対支文化事業の概要」72、80頁。外務省文化事業部「文化事業部事業概要（昭和九年十二月）」（JACAR, Ref.B05015004000, 第30画像, 外務省, B-H-0-0-0-1-002）によれば、1928年4月より東方文化事業上海委員会から派遣された海外派遣研究員は「定員外特選留学生」として学費補給を受けた。
- (17)「特選支那留学生沈璫ノ資格取消ニ関スル件（昭和三年五月九日起草）」JACAR, Ref.B05015516300, 第2-3画像, 外務省, B-H-05-03-00-01-04-00-00, 「特選留学生楊述祖ニ関スル件（昭和六年三月二十四日）」JACAR, Ref.05015516500, 第8画像, 外務省, B-H-05-03-00-01-04-00-00。
- (18)「昭和三年度特選^マ学生名簿（七月現在）」『日華学報』第5号, 1928年9月, 111頁, 『上海自然科学研究所要覧（1936年6月）』10頁。
- (19)注(17)前掲, 「特選留学生楊述祖ニ関スル件」。
- (20)文部省普通学務局「官公私立大学 専門学校支那留学生現状調（大正十三年五月末現在）」JACAR, Ref.B05015397900, 第14画像, 外務省, B-H-05-00-00-01-00-00-03。
- (21)周一川『中国人女性の日本留学史研究』国書刊行会, 2000年, 147頁。
- (22)東北帝国大学庶務課編『創立二十五周年記念 東北帝国大学ノ昔ト今』発行年記載なし, 5-11頁。
- (23)注(1)前掲, 『陶晶孫 その数奇な生涯』「第1章 少年留学生陶晶孫」では, 中等教育を通して身に付けた大正教養主義が陶兄弟の生涯に及ぼした影響について詳細に論じている。
- (24)注(1)前掲, 『陶晶孫 その数奇な生涯』59頁。
- (25)『東北帝国大学一覽 自大正十四年至大正十五年』の学生名簿「理学部物理学教室」「大正十二年入学」には, 陶熾（陶晶孫の本名）の名が記されている。藤田敏彦「陶晶孫君を憶う」（『日本医事新報』第1815号, 1959年2月, 49頁）によれば, 東北帝大医学部生理学教室担当教授であった藤田氏は陶の研究の指導に当たり, 陶が東北帝大に提出した論文の題目は「インドクトリウムの感応インパルスの一, 二の性質, 並に感応電気の累加」であった。
- (26)陶熾「亡弟陶烈的略伝」『学芸雑誌』第11巻第14号 追悼社友陶烈氏専号, 1931年8月。陶烈は京都帝大医学部を卒業後, 同学部生理学教室で学んだのち, 東京帝大医学部精神病学教室に移った。
- (27)注(21)前掲, 『中国人女性の日本留学史研究』146-150, 226, 317頁では, 東京女子高等師範学校を卒業した陶慰孫と陶虞孫の学歴と職歴を詳述しており, また家族とともに日本に長期滞在した女子留学生たちは日本語も上手く, 日本社会に溶け込んでいたことを指摘している。
- (28)澤地久枝『完本 昭和史のおんな』「日中の懸橋 郭をとみと陶みさを」文芸春秋, 2003年, 338頁。
- (29)『尚絅女学院100年史』尚絅女学院, 2002年, 624-625頁。注(28)前掲, 『完本 昭和史のおんな』328-329頁によれば, みさをは音楽教師を目指したこともあったという。
- (30)「晶孫自伝」（丁景唐編選『陶晶孫選集』人民文学出版社, 1995年, 236-237頁）では, 陶の大学における音楽活動について触れている。
- (31)注(26)前掲, 「亡弟陶烈的略伝」。注(20)前掲, 「官公私立大学 専門学校支那留学生現状調」では, 陶は私費留学生として記されている。
- (32)注(26)前掲, 「亡弟陶烈的略伝」。
- (33)『留日中華学生名簿（昭和二年六月現在）』（財団法人日華学会学報部, 1927年）によれば, 当

- 時東北帝大に在籍した中国人留学生24名のうち、私費留学生は陶一人であった。
- (34)『尚絅女学院七十年史』(尚絅女学院, 1962年)「旧職員」の名簿によれば、佐藤みさをは1919年に就職し、1926年に退職している。
- (35)注(25)前掲、「陶晶孫君を憶う」では、陶の一時帰国について記している。注(28)前掲、『完本 昭和史のおんな』339頁では、無錫の陶の実家から仕送りがあり、一定の生活水準を保っていたことを陶の妻みさをは語っている。
- (36)「特選支那留学生二対スル本邦内地修学旅行費支給方ニ関スル件」「特選支那留学生陶熾ノ修学旅行費補給ニ関スル件」「陶熾 日本内地視察旅行報告」JACAR, Ref.B05015800500, 第8-10, 24-25, 31-49画像, 外務省, B-H-06-01-00-05-00-00-01。
- (37)注(36)前掲、「陶熾 日本内地視察旅行報告」第47画像。
- (38)注(4)前掲、「対支文化事業の概要」, 注(18)前掲、「昭和三年度特選学生名簿」。
- (39)東北大学史料館所蔵『大正十二年入学理学部学生原簿』。同原簿の記載内容については、同史料館の永田英明先生から御教示いただいた。記して感謝の意を表したい。注(33)前掲、『留日中華学生名簿』によれば、陶は1926年8月から1927年8月まで休学を予定していた。
- (40)東京で陶が泉橋慈善病院外科に所属していたことは、「中華民国医薬学生秋季懇話会出席者芳名(昭和二年十月二十二日)」(JACAR, Ref.B05015740500, 第3画像, 外務省, B-H-06-01-00-04-02-00-01)で確認できる。また、注(30)前掲、「晶孫自伝」では、泉橋慈善病院外科で医療に関わった日々が語られている。
- (41)『東京帝国大学一覧 従大正十五年至昭和二年』東京帝国大学, 1927年, 168頁, 『三井記念病院百年のあゆみ』三井記念病院, 2009年, 28-29頁。医学講習会参加者の6分の1は中国人が占

めていたという。

- (42)陶坊資「陶晶孫年譜」(張小紅編『陶晶孫百歳誕辰記念集』百家出版社, 1998年)では、同時期に陶が「東京帝大医学部助教」であったと記している。だが、陶夫人の証言に基づいた注(28)前掲、『完本 昭和史のおんな』では、「東京帝大医学部付属病院副手」と記し、また「私立東南医学院呈請立案表格(民国二十一年)」(上海歴史檔案館, No.667)でも、陶の前職は「東京帝大附属医院医師, 日本東京三井医院医師」と記載されている。このため、附属医院所属の肩書の方が正しいと考えられる。なお、注(41)前掲、『東京帝国大学一覧』の医学部職員名簿には、教授と講師のみが掲載されており、陶の肩書を確認することはできない。
- (43)注(40)前掲、「中華民国医薬学生秋季懇話会出席者芳名」。同仁会については、丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動 同仁会研究(一)〜(四)」(『日本医史学雑誌』第45巻第4号, 第46巻第1-2, 4号, 1999年12月, 2000年3月, 6月, 12月), 大里浩秋「同仁会と『同仁』」(注(3)前掲『中国人日本留学史研究の現段階』)を参照。
- (44)注(4)前掲、「特選支那留学生補給規定」「特選支那留学生補給ニ関スル内規」によれば、休学は1年まで許可され、その期間の学費補給は停止することが定められていた。また「特選支那留学生学費補給現状(昭和二年三月現在)」(JACAR, Ref.B05015513100, 第4画像, 外務省, B-H-05-03-00-01-01-00-02)には、当時の特選留学生15名の氏名が記されているが、その中に陶の名前はない。
- (45)『東京大学医学部百年史』(東京大学出版会, 1967年, 290頁), 『同仁』各号の奥付「同仁会の目的, 事業及び役員」など参照。
- (46)注(15)前掲, 「上海自然科学研究所設立ニ関スル専門家協議会記事」第11画像。
- (47)陶熾編『陶烈論文集(一)』財団法人同仁会,

- 1933年。
- (48)注(36)前掲,「陶熾 日本内地視察旅行報告」第47画像。
- (49)小崎太一「陶晶孫と関東大震災」(朱壽桐, 武継平編『創造社作家研究』中国書店, 1999年)では,「理学士」と「特選留学生」, 帰国後の短編小説「博士的来歴」に主人公の官費を失った後の苦勞が記されていることを指摘している。また「理学士」と「特選留学生」の内容や脱稿, 発表時期をもとに陶が官費を失ったのは1925年ではないかと仮説を立てている。
- (50)「理学士」『音楽会小曲』創造社出版部, 1927年(上海書店影印本, 1989年), 110頁。なお,「理学士」,「特選留学生」のテキストの中の「拳匪賠款」という表現は,『陶晶孫選集』(『晶孫全集』第一集, 上海暁星書店, 1941年を底本とする)では,「庚子賠款」に改められている。
- (51)注(50)前掲,「理学士」『音楽会小曲』112頁。
- (52)「特選留学生」『音楽会小曲』116頁。
- (53)同上, 118頁。なお, 引用文の「支那」という語は,『陶晶孫選集』では削除されている。
- (54)同上。
- (55)注(50)前掲,「理学士」『音楽会小曲』114頁。本稿で述べる通り, 陶晶孫は辰野隆の日本語訳を愛蔵していた。このため, シラノの台詞の日本語訳は, エドモン・ロスタン作, 辰野隆・鈴木信太郎訳『シラノ・ド・ベルジュラック』(白水社, 1922年)142-143頁より引用した。
- (56)陶晶孫「烹斎雜筆」『陶晶孫日本文集』華中鉄道株式会社総裁室弘報室, 1944年, 38頁。陶は日本語訳のほか,「独英漢訳」を所蔵していることを記しているが, 北京図書館編『民国時期総書目 外国文学』(北京: 書目文献出版社, 1992年)を確認する限り, 民国時期に同戯曲の中国語訳は刊行されていない。
- (57)代表的な先行研究として, 中西康代「陶晶孫初期作品集『音楽会小曲』と新感覚派に関する一考察」(『東京女子大学 日本文学』第83号, 1995年), 小崎太一「陶晶孫による日本モダニズムの持込み」(『現代中国』第79号, 2005年)などが挙げられる。
- (58)例えば, 陶乃煌「懷念陶晶孫——写在陶晶孫誕辰百年記念之際」(張小紅編『陶晶孫百歲誕辰記念集』百家出版社, 1998年), 太田進「陶晶孫とプロレタリア文学」(『季刊中国』第93号, 2008年6月)では, 1929年1月或いは2月初旬と記している。しかし, 陶彌麗「上海便り」(『むつみのくさり』第20号, 1929年8月)には,「昨年末無錫の家に帰り, 暫く保養いたしまして, 三月初め当分学校で教えるつもりで当地にまいったのでございます」と書かれている。陶彌麗は佐藤みさをの中国名である。
- (59)先行研究として, 注(1)前掲,「帰国後の陶晶孫」, 尾崎秀樹『上海1930年』(岩波書店, 1989年), 小谷一郎「一枚の写真から——帰国前の陶晶孫, 陶晶孫と人形劇のことなど」(『中国文化』第59号, 2001年6月), 注(58)前掲,「陶晶孫とプロレタリア文学」などが挙げられる。
- (60)東南医学院の校史は, 主に上海図書館所蔵『上海私立東南医学院一覽』(発行年記載なし), 安徽医科大学檔案館所蔵『東南医学院要覽 民国二十五年年度』(1936年)に拠る。なお, 安徽医科大学は1952年に安徽省に移転した東南医学院の後身にあたる。
- (61)見城悌治「明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向」(『国際教養』2号, 2009年3月),「留日医薬学生の帰国後の活動と現代中国における評価——千葉医学専門学校・千葉医科大学留学生の事例——」(『国際教育』3号, 2010年3月),『近代の千葉と中国留学生たち』(千葉日報社, 2009年)では, 郭琦元をはじめとする, 東南医科大学設立に携わった千葉医専卒業者の業績を詳述している。
- (62)注(60)前掲,『東南医学院要覽 民国二十五年年度』

「現任教授講師助教一覧表」によれば、1936年当時、講師以上の教員26名の学歴の内訳は、日本留学14名、ドイツ留学5名、アメリカ留学1名、フランス留学1名、中国国内の大学他卒業5名であった。また「前任教授一覧表」により、前任教授と合わせた場合、総数86名のうち53名は日本留学経験者であったことが確認できる。

(63)注(60)前掲、『東南医学院要覧 民国二十五年度』「前任教授一覧表」「現任教授講師助教一覧表」によれば、前任教授と在職中の講師以上の教員総数86名のうち24名は千葉医学専門学校、千葉医科大学の卒業生であり、院長、歴代の教務長、医務長はいずれも同二校の卒業生であった。

(64)注(60)前掲、『上海私立東南医学院一覧』「大事記」。褚民誼の経歴は、呉凱声「我所知道的褚民誼」（『鐘山風雨』2003年2月15日）などを参照。

(65)注(60)前掲、『上海私立東南医学院一覧』「大事記」。

(66)例えば、教務長を務めた千葉医大の博士号を有する李祖蔚は、陶と同時期に特選留学生であった。注(40)前掲、「中華民国医薬学生秋季懇話会出席者芳名」によれば、懇話会を通して陶と李は顔見知りであったと考えられる。

(67)注(60)前掲、『上海私立東南医学院一覧』「大事記」では、1930年2月に陶が生理学実習室主任となったことを記録しているが、『東南医学院要覧 民国二十五年度』「本学院歴年大事記」では、1930年1月に衛生学教室主任に就任したことを記している。1935年5月までの出来事を詳細に記した「大事記」と比較すると、1936年に刊行された「本学院歴年大事記」の記載はやや大雑把であり、「大事記」からの抜粋のように思われる。要覧が刊行された時、陶は衛生学教室を担当していたが、1930年の人事の動向からは、当初は生理学実習室主任であった可能性の方が強いと判断できる。

(68)注(42)前掲、「陶晶孫年譜」によれば、1930年8月に陶は衛生模範地区主任に就任した。陶熾「中

国医界漫談（二）」（『同仁』第5巻第5号、1931年5月）では、無錫の教育学院が衛生模範区の設置を立案し、陶に管轄を依頼したことが語られている。

(69)飯島渉『感染症の中国史 公衆衛生と東アジア』中公新書、2009年、114頁、樊波・梁峻「浅析中华民国卫生法制之得失」『中国卫生法制』第19巻第1期、2011年1月、11頁。

(70)注(60)前掲、『上海私立東南医学院一覧』「大事記」。

(71)「同仁座談会」『同仁』第5巻第10号、1931年10月。

(72)下瀬謙太郎「上海に於ける医学校病院參觀記（其三）」『同仁』第4巻第12号、1930年12月、19頁。東南医学院見学後、設備について「唯貧弱の二字に尽きけり」と感想を記している。

(73)注(60)前掲、『上海私立東南医学院一覧』「大事記」。龐京周「上海市最近十年來の医薬鳥瞰」（『同仁』第8巻第5号、1934年5月）によれば、国立上海医学院：学生約68名、専任教員32名、兼任教員5名、聖約翰大学医学院：学生約53名、専任教員7名、兼任教員20名に対して、東南医学院：学生約420名、専任教員14名、兼任教員9名であった。

(74)注(60)前掲、『上海私立東南医学院一覧』「大事記」。以後、陶は非常勤講師として衛生学教室を担当する。このことについては、別紙で改めて論じたい。

(75)陶熾「支那医界漫談」『同仁』第5巻第3号、1931年3月、17頁。

(76)同上、19-20頁。

(77)同上、16頁。

(78)『シラノ・ド・ベルジュラック』第2幕第7場で、シラノは自分が風車と格闘する無鉄砲なドン・キホーテに似ていることを語っている。

(79)『楽群』に掲載された翻訳作品については、拙稿「陶晶孫のプロレタリア文学作品の翻訳——『楽群』を中心として——」（『中国文学研究』

- 第33期, 2007年12月)「陶晶孫のプロレタリア文学作品の翻訳(続)——人形座, 築地小劇場との関わり——」(『中国文学研究』第35期, 2009年12月)を参照されたい。
- (80)「畢竟是個Petit Bourgeois罷了!」のテキストは、後に「彌吉林与雪才納」と改題して第二創作集『濃霧』(支那書店, 1930年)に収められ、またその際に第3章の一部は短編小説「大学教授」に改編された。この「彌吉林与雪才納」はさらに『晶孫全集』第一集(上海晚星書店, 1941年)に収録される際、再度「畢竟是個小荒唐了」と改題されている。これらのテキスト間の異同については、別紙で改めて論じたい。
- (81)注(1)前掲, 「離散的語言体験——陶晶孫新論」。注(1)前掲, 『陶晶孫 その数奇な生涯』(281-291頁)では, 「畢竟是個小荒唐了」が陶の小説の中で唯一の中編小説であり, 第一人称の自暴自棄な口調を用いた特異な作品であることを指摘している。また濱田麻矢「文化的“混血児”——陶晶孫与日本」(『中国現代文学研究叢刊』1996年第3期)では, 日中のはざまに立つ陶の自嘲と焦燥が描かれていることを述べている。
- (82)「到上海謀事」『楽群』第1巻第4期, 1929年4月, 146頁。
- (83)注(1)前掲, 「離散的語言体験——陶晶孫新論」89-93頁。
- (84)「畢竟是個Petit Bourgeois罷了!」『楽群』第1巻第7期, 1929年7月, 55頁。なお, 本作品における「拳匪賠款」という表現は, 『陶晶孫選集』では「庚子賠款」に改められている。また引用文の「研究を数年延期する~失望することもないだろう」という箇所は, 同全集では削除されている。
- (85)注(84)前掲, 「畢竟是個Petit Bourgeois罷了!」65頁。引用文の「当然ながら義和団の匪賊よりも少しは進歩した訳だ」という箇所は, 『陶晶孫選集』では削除されている。
- (86)同上, 65頁。
- (87)「畢竟是個Petit Bourgeois罷了!」『楽群』第2巻第8期, 1929年8月, 139頁。
- (88)注(84)前掲, 「畢竟是個Petit Bourgeois罷了!」『楽群』第1巻第7期, 71頁。
- (89)注(1)前掲, 「帰国後の陶晶孫」。
- (90)注(49)前掲, 「陶晶孫与関東大震災」では, 「博士的来歴」に記された関東大震災を境とした日本文学の転換の状況について述べている。
- (91)「博士的来歴」『大衆文芸』第2巻第2期, 1929年12月, 213頁。
- (92)同上, 211頁。
- (93)同上, 212頁。
- (94)同上, 213頁。「E」とは, 作品に登場する日本人ダンサーの名前である。
- (95)同上, 215頁。
- (96)同上。
- (97)『同仁会四十年史』財団法人同仁会, 1943年, 182-183頁, 195頁, 注(33)前掲, 『留日中華学生名簿』「諸言」。
- (98)注(33)前掲, 『留日中華学生名簿』「諸言」では, 名簿作成の目的として, 中国人日本留学帰国者との連絡, および彼らと「第二の故郷」日本との関係の維持を挙げている。
- [付記] 本研究は科学研究費補助金[若手研究(B)課題番号: 19720083]の助成を受けた。また貴重な蔵書の閲覧にあたり, 東華大学の陳祖恩先生, 中国社会科学院文学研究所の劉平先生, 趙京華先生, 董炳月先生, 尚絅学院同窓会の鶴間順子先生に多大なる御助力をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。